

奈良山出土の蔵骨器と墨

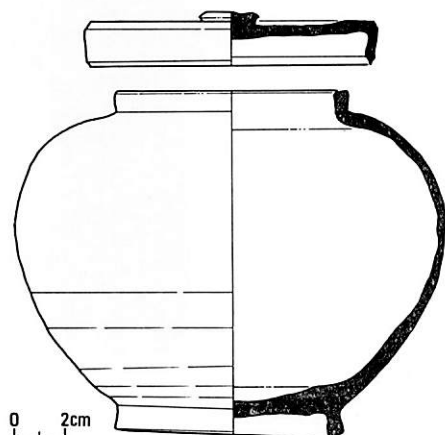
平城宮跡発掘調査部

奈良山丘陵から数年前に出土した蔵骨器と萬年通宝2，神功開宝3などの一括遺物が昭和52年4月，発見者によって平城宮跡発掘調査部に届けられた。調査部では所定の手続きをとると共に現地を確認したが，発見時に蔵骨器中からとり出したというカーボン塊を光学的な観察をした結果，墨であることが判明した。現存するのは小指頭のもの1個と米粒大の小片数個のみであるが，昨年，奈良市平松町（平城宮跡発掘調査部 第100次調査）で完形の墨と筆管が蔵骨器中からみつかったことから，とりあえずここに紹介する次第である。

蔵骨器の出土地は奈良市奈良阪町で，ウワナベ古墳から500m程北へ谷を入った東側の丘陵尾根上である。標高107mの丘陵頂から西へやや降ったところに自然崩壊による崖があり，この斜面に蔵骨器の一部が露出していたのを，昭和50年秋通りがかりにみつけ，掘り出して自宅に持ち帰ったという。地下40cm程のところに埋置されていたらしいが，その後の崩壊のため墓坑などの形跡はすでに認められなかった。

蔵骨器はいわゆる葉壺形の須恵器であり，直立する短かい口縁と丸く張った胴にやや外反する高台を持つ。外面は口縁から胴上半部をクロコ撫でし，下半はヘラケズリをする。底部外面はヘラケズリに撫でを加える。色調はやや白っぽい灰色を呈し，胎土中には細砂を含む。蓋は平坦な頂部と扁平なつまみを持ち，口縁部は直立する。頂部はヘラケズリ，口縁部は内外ともに撫でである。色調，胎土は壺に同じである。時期は型式からみて奈良末頃とみられる。総高さ14.8cm。壺高さ14.0cm，口径9.1cm，最大径17.1cm，底径9.0cm。蓋径11.2cm，高さ2.4cm。

なお銅銭5枚は，器底に付着した銹から器底中央に一枚を置き，この四方に文字面を上にして並べてあったようである。いずれもサビが削られているが，うち三枚には文字面のサビ上に絹とみられる細い布目痕が認められる。萬年通宝はともに普通型であるが，うち一点(a)は6.5gもあり極めて重い（平均4g）。神功開宝は大様型(c)と長刀型(d・e)がある。（佐藤興治）



×印 出土地点